

備陽史探訪

第72号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

新市町相方城跡に

就いて

会長 田口 義之

最近、新市の相方城跡に関する議論が喧しい。我々備南に住むものは「同城跡は天正初年、有地元盛によって築かれた」と信じ込んでいたのであるが、「同城跡の石垣は早くて天正末年、石垣の技術から見て、文祿から慶長年間の築造とするのが最も妥当である。たかが田舎の一人人に過ぎない有地氏に築けるものではない」とする説〔中井均「相方城跡の石垣についての一考察」中世城郭研究第九号等〕が飛び出し、たちまち全国を風靡する勢いである。

果たして、相方城跡の石垣は、そんなに新しいものなのだろうか。ここでは相方城跡に関する文献資料を検討し、私なりにこの問題に迫ってみたいと思う。

先学〔芸備第七集小都隆『広島県相方城跡の研究』等〕が指摘してい

るように、この城跡に関する同時代史料は存在しない。今日見ることが出来るものは江戸期に著された左の文献のみである。

『備陽六郡志』(一八世紀後半)

『福山志料』(一八〇九完成)

『西備名区』(一八〇四完成)

『備後古城記』(不詳江戸後期か)

『相方村古城主有地殿先祖覚』

〔江戸前期〕

※『萩藩閩閩録』八十三有地右衛門書出は、以前に述べた〔拙稿

『備後有地氏について』芸備地方史研究一四六号〕ように誤りが多く、ここでは取らない。

最も注目されるのは『備後六郡志』と、『相方村古城主有地殿先祖覚』である。『備陽六郡志』は、相方村古城の項で城主を有地美作守とし、「神辺を初、所々の古城、石垣を崩し、家普請、川除などに遣ひ侍れども、當城は石垣全して馬出し堀などの形残れり。」と述べ、同城の石垣がほぼ完全に残ったのは、戸手天王社の別当が社殿造営の際、當城の石

垣を使用できるよう、村の庄屋と契約したためだと伝えている。

また、『相方村古城主有地殿先祖覚』(「福山城博物館鏡檜文書館に写本がある」)は、その奥書を信ずるなら、江戸前期の寛永一八年(一六四一)の成立となり、相方城跡に関する最も古い文献と言ふことになる。

同書によると、相方城は、宮氏から分かれた有地氏の三代元森(ママ、元盛のこと)が、「宮領うばわれ候事無念とや被思召、一度宮領御切取可被成たくみにて相方村城を被成無程宮領不殘切取宮之有地元森之御名乗被成候」と旧宮領を奪回するため相方城を築いたとある。年代は書かれていないが、続いて「天正時分より森(毛利)様拾式ヶ園の軍大将被仰付候由」とあるから天正年間のことと考えられる。

更に同書は次の二点で重要である。一つは、同書が相方城跡の所在する相方村在住の人物によって著された事である。奥書に見える後藤氏是有地氏の遺臣と伝える家で(「西備名区」、後藤姓は今でも相方地方に多数存在する。

今一つは、同書が相方城跡に関する他の二つの文献(「西備名区及び福山志料卷之八人物有地氏の条」)の元に成ったと考えられることである。

この点は厳密な文献批判を行う必要があるが、もしこの二点が認められるとしたら、導き出される結論は簡単である。先の『備陽六郡志』の記述と相まって、同城跡に関する伝承は有地氏の築城とするもの以外は地元に伝わっていないことが確認されるのである(「地元の農民に過酷な負担を強いたはずの石垣普請が全く忘れ去られると言ふことがあり得るだろうか」)。

最近の論者は、相方城を織豊期城郭として捉え、その石垣の築造年代を文祿・慶長期にまで下げて考える傾向がある。同城を単に石垣のみを見て考察すれば確かにそうであろう。しかし、なぜ文献資料にそのことが現れないのか、という疑問に対しては明確な答えが用意されていないようである。また、同城跡出土の瓦(「天正初年と推定」)に関しても恣意的な説明がなされがちである。更に、慶長初年築城論者に最も致命的な欠陥、同時期の毛利氏系山城に類例が見られないのはなぜか、という根本的な問題が残されている。

筆者は、闇雲に有地氏築城説を主張しようとするものではない。只、文献資料から判断する限り、現時点では、有地氏以外に築城主体者はあり得ないと思うのみである。

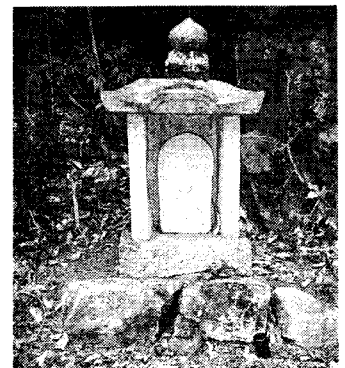
路傍の石仏に思う

出内 博都

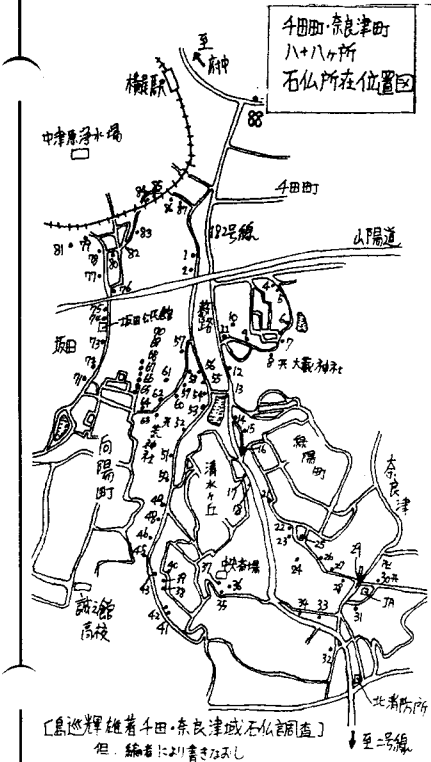
弘法大師の開かれた「四国八十八ヶ所の霊場巡り」、所謂「お遍路さん」の信仰が広まり、各地にミニ八十八ヶ所ができるのは近世中期以降から明治期にかけてのようである。千田地区においても南西部の菟路・坂田・それに奈良津の一部を加えて明治期には成立していたようである、その大部分のお地藏さんは、位置は、動いているが現存して、庶民信仰の深さを物語っている(地図1)。更に、北部の峠山の北麓にある「一松院」を中心に山麓一帯に一つの信仰圏がある。この方は地藏さんの数の確認はむずかしいが、現存・伝承によれば大部分確認できる。しかし千田地区で、かつて千田沼と言われた中央低地の東南部には遺跡が見当たらない、この地区は以前に三角縁神獣鏡の出た「蔵王原遺跡」や「千塚古墳群」などあり、開発の古い地区で南にこの地方の最高峰「蔵王山」をひかえ、更に村の鎮守「宇山八幡宮」が最初に勧進された由緒ある地区である。しかし時の流行とでも言うこの「新四国八十八ヶ所」が成立した形跡が伺えない、こうした信仰

圏ができるには色々な条件があるのだろう。しかしこの地区にすばらしいお地藏さんがあることはあまり知られていないようである。それは蔵王山の北麓にある鍋屋集落から山陽自動車道の隧道をくぐって、蔵王山の北の沢を約四百m上った所に少し広い段原がある、その一角にこの地藏さんはまつられている(地図2)。先ず目につくことはそのすばらしい石造のお須屋である、軒幅七十cmの寄棟造りの石殿で、正面は唐破風の御殿造り、屋根の中心に高さ八cmに二十cm角の露盤に二段の宝珠をのす完全な御殿形式である。仏殿は高さ六十三cm・幅三十八cm・奥行き四十七cmの広さで、舟型光背の石像は幅三十cm・高さ五十cm、表に三十cmの阿弥陀如来像をきざみ、右方に讃劬、中央に十八はん、左方

にことひきくと刻まれている。これが高さ三十五cmの積み石と幅六十五cm・高さ十七cmの台座の上に置かれている様は実に立派である(写真1)。なおこのお地藏さんの場合山の岩肌を堀とって高さ二mの石垣を築き、五mに三mの敷地を作っていることである。その敷地の北西の隅に祠らされていることからみて、簡単なお籠堂の施設があったものと思える。このお地藏さんに関連してこの沢の入口(約三百m下手)に々々さぬき・六十九番・観音寺々と刻まれた同じく舟形光背の像がある。この方は三方と屋根を平石で囲んだ簡単なお須屋である。屋根石は九十cmに五十七cmの大きさで、石の厚みはいずれも十cm余りある、仏殿は六十cmに五十五cm・高さが八十cmあるが、石像の台座に鉄道の側溝の角型U字管(高さ



(写真1)

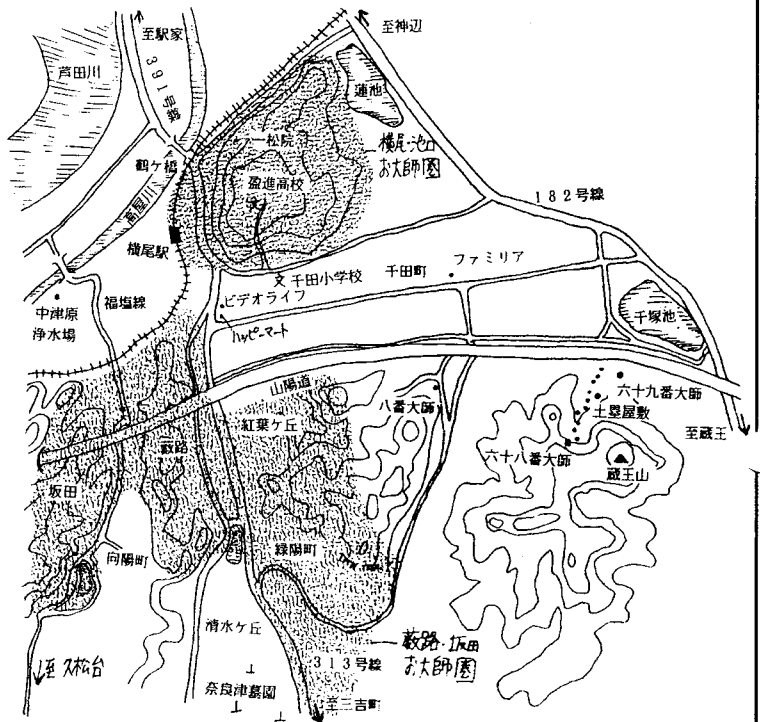


(地図1)

三十cm)を使用しているのです、仏像の頭がつかえ先を少し欠でいる、そのため六の字の上半分がとんでおり、他の二体の石仏を合祀しているのでいかにも窮屈である(写真2)。と他にこの地区では、この沢の一つ西の谷(旧神辺街道の道端)に表の仏像の上に八番だけ刻んだものがある、仏像も小さく形式も簡単であり、刻字が石全体の風化度からみて少し新しい感じである。番号の連続性からみても、前二者とは関連しないようである。こうしてみると、大師信仰は必ずしも遍路形式をとらず、特定の仏を単独に祀る場合もあったことが知られる。何のために、誰が、何時と云うことになるのか分からない場合が多い、この地藏さんの場合も四〜五十年前は地区のお年寄りがお参りしていたことを知っている人はあるが、どんないきさつでこ

んな立派なものが作られたかは分からない。六十八番札所は、香川県観音寺市にある「七宝山神恵院」で真言宗大覚寺派である、この寺と千田の結び付きも特に考えられない、山号の七宝山が、ことひききになっているのは、琴弾山に琴弾八幡宮があり、この神恵院は八幡宮の別当寺であったものが慶応四年の神仏分離で分けられたもので、昔ながらの「琴弾」を称したものであろう。また麓

にある六十九番は同じく「七宝山観音寺」で神恵院と同じく大覚寺派である。この二寺は二つの寺とはいっても境内が隣接し、ほとんど一つの寺のような雰囲気である。八十八ヶ所のうち二寺が同じ山号をもち、隣接しているのはここだけである、この二寺のみが単独にこの地に祀られたのはなぜだろうか、今となつては知るよしもないが、あのすばらしい石のお須屋の謎はふかまるばかりで



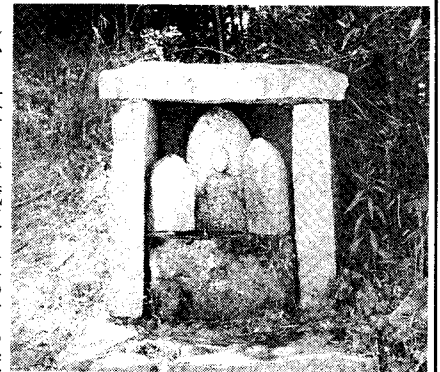
(地図2)

謎といえ、このお大師様への道が単なる山道とは思えないすばらしい道である。幅員といい、勾配といい参道というにふさわしいものであったと思われる。更に平時は水がないが、降雨時にはかなりの出水も予想される沢には、三百mにわたって九ヶ所の砂防堤が築かれている、高いものは数mをこえる高さである。岩を砕いた大石を丹念に積んだ見事な石垣である。単に一篤志家や一集落の思いつきではできない工事である、藩営工事か郡(村)などの公的工事であろう。

謎といえ、更に両地蔵の中間に現在も滝々と水をたたえた井戸があり、その上手に東南と北西に三十数mの土塁を巡らした屋敷跡がある、後年、畠としてつくられたので、やや、傾斜がついているが、畠の水よけとはおもえない土盛りである。天文年間のお神辺合戦に関連して、蔵王山城が云々されるが、そんな大袈裟なものではないにしても、一考をようすることがらであらう。

何の関連もない事柄を羅列した訳ですが、この狭い地域によくも謎が集中したものである、現在の地形・交通・生業では考えられない何かがあるようにおもえる、上のお地蔵さ

ある。



(写真2)

石屋戸ごもりの
解釈について報告

門田 幸男

六月八日の『古事記を読む』講座はアマテラスの石屋戸ごもりの段の直前になっていました。ここは古

事記神話のハイライトの簡所なので、考えていた「コモリ」に関する意見を聞いてもらいたくて、話をする事を申込み、了承されました。以下その顛末を記して、出席者以外の諸兄の御批判を給りたいと思います。

石屋戸ごもりとは一体何なのか？という問いを諸先生の本に尋ねてみると、「恐れて隠れた」という説があります。古事記原文では「見畏みて、天の石屋戸を開きてさし畏りま

しき」とあるから、「恐れて」というのはわかりませんが「隠れた」とは書いていません。「こもる」と「隠れる」のとは似ているけれど、同じなのでしょう。

「隠れる」というのは一般的表現で、「こもる」というのは神事にかかわる場合に主として使われています。普通、祭りの当事者が祭りの前に「こもり」ます。民俗学の権威柳田国男先生の調査による「こもり」の実態を見てみましょう。

呼び名は「居ごもり」（こもりの状態）、又は「身替り」（こもりの結果）です。この呼び名から考えられる事は、「こもり」を経れば生きかた人間のままで神、又はその代理と化ることができるという事です。補充文参照。「こもり」には、

一、仮小屋を作って入る。一注一

二、家族とは別火の食事。一注二
三、無音無言の生活。

四、洗濯せず、髪も結わず。

五、刃物や針を持たず。一注三

六、外出せず、外部の者も入れず。

などの作法・禁忌があります。柳田

先生は、清い祭りの人になる準備期間だと言っておられます。精神潔斎する意味であるらしいです。

梳も見じ屋中も掃かじ草枕
旅行く君を齋ふと思ひて

という歌が万葉集四二六三番にありますが、どちらも清い人にはなれそうもありません。

民俗学者の吉野裕子先生は、「こもり」は妊娠期間のまねごとだと言っておられますが、この説を当てはめると前記の作法・禁忌は全部クリアー出来ます。

又万葉集三四六〇番に、

誰ぞこの屋の戸押そぶる新嘗に
吾背を遣りて齋ふこの戸を

というのがあります。アマテラスも大嘗一注4をきこしめす殿に入るから、この歌の女性同様に神と共食し、そして共寝をするのでしよう。

注5。巫女は神と共寝して、神の種を受けて、神の子を産む役目なのです。しかし実際問題として、霊体

である神の子を宿す事は出来ないから、巫女自身が神の子と化って産ま

れ出るといふ事になるのです。それで、「巫女」と書いても「御子」と呼ばれるのであり、神の子に変身する時間が「こもり」なのです。



するには肉体があつて食物を食べることが前提となります。この事から、アマテラスとスサノオの姉妹は人間の姉妹であると結論する事が可能です。又もし死んだとするなら、生き返る事など有り得ない事です。イザナミの場合も肉体は腐り、生き返らなかつたではありませんか。このように、死んだので復活させるとの説明は道理から外れています。

一部の先生方は、冬至の頃の弱々しい太陽を力強く復活させる祭りだと推定されていますが、ひどいスサノオの暴行を良い方に思いかえて宣り直す行為は、優しい姉としての情愛であつて、太陽又はその精霊が、そのような優しい情愛を示す等考えられない事だと私は思うのです。一番多い考え方は、アマテラス自身が梭でホトを突いたと書紀の本文を理解して一注6、アマテラスは死に、それでその復活を促す祭りが、石屋戸ごもりの段の主題だという説です。ですがこの説には不合理な点があります。第一に神は霊体であるとするなら、死ぬはずがありません。肉体を持つ生物だけが死ぬのです。又スサノオは、大嘗をきこしめす殿に尿をしたと書いてありますが、尿を

(出生)には、母の胎に「こもり」
ました。そこでコノ世からアノ世に
転生するのにも、疑似母胎にこもら
なければならぬのだとする考え方が、
「こもり」という行動を誘った
と考えるのが、吉野説の根幹です。

神は霊体であつて肉体を持ってい
ないとする考え方は現代の考え方で、
古代では神も人間同様に肉体を持つ
と考えたからイザナギの死体が腐つ
ていたと述べられているのだ、と言
う人もあるでしょう。だがイザナミ
の話でも、復活する事はありません
でした。アマテラスが「隠れた」と
いう説を取れば、死んだわけではな
いので復活する必要はありません。
けれども「こもり」は、アノ世とコ
ノ世の境を越える重大な場面での行
為ですから、「こもりませす」という
言葉は、おろそかには出来ない重い
言葉であると私は考えるのです。

その故に、「こもりませす」の字を
無視する「隠れ説」は賛成出来ない
のですが、当日出席されなかった先
輩諸兄に報告を兼ねて、ご意見を伺
います。私の話がわかりづらかった
出席者にも、読んでみていただきました
のです。

注1：疑似母胎。祭祀が終わり次
第焼却される。

注2：母胎からの栄養。

注3：母胎が傷つくため。

注4：新嘗と同じ

注5：大嘗殿には寝床も設けられ
ている。

注6：古事記では、服織女がホト
を突いて死ぬが、書記ではアマテ
ラスが「梭をもて身を傷ましむ」。

注7：元の名前は、オオヒルメと
いう巫女。(日本書紀)

「こもり」について補充文
年の暮れの事をオオツゴモリとい
います。辞典によれば、旧暦の月末
は月がかくれて見えなくなるから、
月がこもつたのだと見ているらしい
のです。沖繩では、太陽も夜西の空
に沈み、太陽の洞窟(テダガガマ)
にこもり、朝東の空に再生すると考
えられていました。では、なぜ「隠
れ」でなく「こもり」なのでしょう。
私は、日本人の生活に「こもり」が
浸透しているから、「こもり」と言
えばすぐピンとくるからだろうと思
うのです。

産まれた直後は産屋に「こもり」、
子供のころは小正月にトンド小屋に
「こもり」ます。秋田地方では、カ
マクラに「こもり」ます。

この名前にこだわってみますと、
釜は水と米がこもって飯に化り、罐
には水がこもって蒸気に変身するし、

窯には木材や土器がこもって炭や陶
器に変身します。鞍は、凹形の人が
座る道具ですが、神座・岩座なども
神が座るとされた凹形の物です。又
マクラは、頭が安座する凹形の寝具
です。つまりカマクラとは、若返り
を期する「こもり」のための穴グラ
だということになります。

このように、日本人は折々に仮屋
にこもって産まれ変わり、若返る事
を願つたのでありましょう。この理
屈をオオツゴモリに当てはめれば、
新しい年を迎える大きな節目に当た
つて、生まれ変わり若返ろうと考え
たのだと推定出来ると思うのです。
新年初頭に汲む水を、若水とか変若
水とか呼ぶ事からも、「こもり」と
若返り又は変身願望が結びついてい
る事がわかります。

このように、「隠れ」は何の意味
も持っていないが、「こもり」には
変身する「注」という意味が含まれ
ていますので、石屋戸こもりを簡単
に「隠れた」と読むのは、古事記神
話を真に理解した事にはならないと
私はかんがえます。

最大の若返りは、赤子になる事
です。それでカマクラにしろトンド小
屋にしろ子供が「こもり」ものであ
るのは、大人が仮小屋から出てきて
も意味を成さないからなのです。

カマクラの中で祀っているのは、
水神様です。雪洞だからという考え
方もありますが、冬は五行説で「水
気」の季節ですから、冬の神をアノ
世へ送り帰す祭りととらえることも
可能です。トンド祭りが歳神送りと
言われているのと同じように、来訪
した神には御用済になり次第即刻お
帰り願いませんと、次に訪れる春の
じゃまになるからだと思います。

ヤマトタケルの困惚び歌に、
倭は国のまほらま 豊づく青垣

山籠もれる 倭し麗し
とあります。国文学者は「マ秀ラ」
と解釈していますが、「こもり」の
だから「マ洞」でなければなりません。
夜毎にこもって日毎に若返るか
ら、ヤマトはみずみずしく美しいの
であり、故郷だからというのは、そ
の一部であると思うのです。

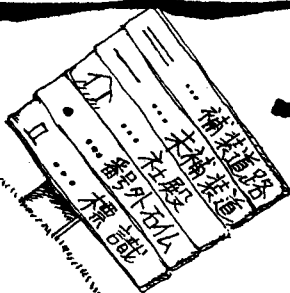
注：オコモリの事をミカワリとも
いう。柳田邦男氏調査、千葉原。
引用文献：『古事記』『日本書紀』
『万葉集』ともに岩波文庫。



川我村、川南村、下加茂、工村、三ノ宮、地名(村名)が戻ります。

願主の名前もほろびて、護められて、二石仏に込められた願いの田にはあるのも、願いはな

道

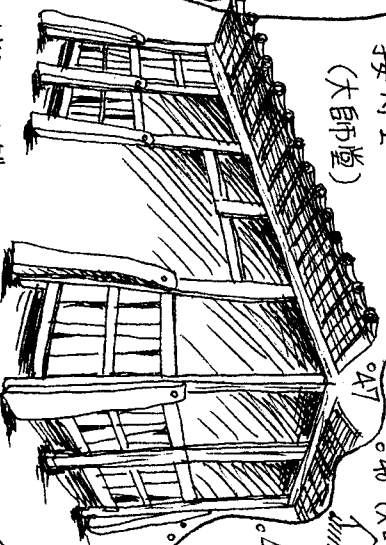
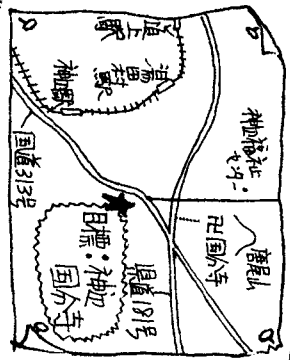


32番の3番までか
一番の難所
心も、登りた、
頂上から眺めたい、
風景かな!

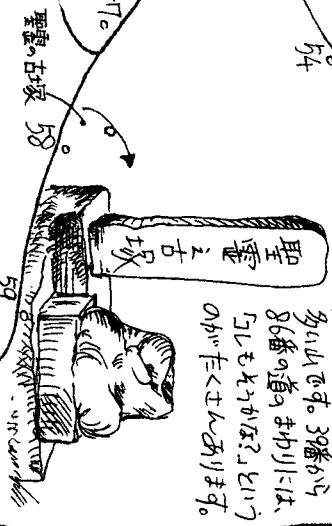
3安地藏
道のワザを
女性ワザを
連想せよのか、
生産の神は
道のワザに
似せられたか、
多いようです。



石鏡山



お父さんだっと思、ていましてか、
予想外に立派なものでした。
檀には弘法大師像の彫明玉像
と、もう一体の仏様がいらした。お、
弘法大師の像には、毛糸の
ぼうしと前だゆか、
着せておりました。マウ



名も無 古墳の
多い山です。39番の
86番の道、おわりには
51もそのかほ? という
おかしさがあります。

唐尾山八十八箇所

五見八草子 ▶ 唐尾山八十八箇所は、天

木目あれこれ

熊谷 操子

先達って、京都の三十三間堂に詣でる機を得た。後白河天皇の院宣によって、平清盛が造営したこの蓮華王院の本堂には、一〇〇一体の等身大の千手観音と二十八部衆が整然と並んでいて、何度観てもその壮観には圧倒される思いがする。

薄暗い堂の中、仏像までは三メートル以上はあるだろうか。矯めつ眇めつしてよく見ると、七条仏所の慶派の作品群の中には、裾の方の金色が少し剥落したものもある。太股あたりの衣紋に添って微かに生地の木目が流れるように見え、その衣紋をより美しく強調しているようであった。当時、満慶の弟子が、金色の剥落した後の、衣紋に寄り添うようなこの木目を計算して彫ったのだろうか。そんなことを考えながら次々と仏像を追っていた。

平成六年十一月。〆 円空―慈悲と魂の芸術展が大阪ならば高島屋で催された。いつか鈍彫りの円空仏を観たい観たいと思っていたので、跳んで行ったのは言うまでもない。江戸時代初期の遊行僧である円空

の事を、東京芸大教授で、美術院国宝修理所の所長である西村公朝氏は、救世観音の化身だと言い、他に類を見ないその獨創性を高く評価している。

会場に並んでいた殆んどは、神像には、なにかしら豊かなほほえみがあるように見えた。それは、こぼれ溢れる慈愛の笑みなのかとも知れない。それと同時に、それらにはみな夥しい木目があった。

穏やかな水の流れにも似たもの。また自然の怒りにしつかり耐えたであろう変化に富んだ年輪。素地仕上げの伸び伸びした作品群には、それらをそのまま巧みに生かしてあった。作仏聖としての荒荒しいまでの造形やユニークな表現からは、そこはかとない親しみや共感さえ覚えるのである。

円空が自分の顔を水鏡で写して彫った像だとも言われ、一説には庚申像とも伝えられているものがあつたが、心の内から溢れるような喜びが、その像にも見えるような気がした。それは、その美しい年輪の間隔が持っている靈性みたいなものや、量感に似たものから感じるのではないかしらと思つた。その像の前では、何人もの人達がほほえんでいたのを思い出す。

円空もきつとそれらの年輪を愛し、何べんも撫でさすりながら彫つたのではあるまいかと、私は勝手に想像し、これほど木目を愛した僧は他に居ないだろうと思つた。



いつ何が発掘されるか分からない。それに対して何が考えだされるか分からないというのが考古学。一寸先は闇々とはよく言ったものだ。それにしてもえらい世の中になつた。和泉市の、池上曾根遺跡の神殿とみられる場所に残っていた椽の柱材から、その築造期が紀元前五〇年代だったことが判明したという。

それは〆年輪年代法という科学的な新方式で実年代を確定したもので、考古学史上こんな輝かしいニュースはない。土器編年と、勾玉の穴で推定していた年代に、嬉しい見直しを迫るといふわけである。木目って実にたのしいなあ。

中央アジアの旅紀行 V

神原 正昭

フェルガナーサマルカンド 五〇〇 Kmの砂漠の旅



砂漠の中に、著者

旅も六日目である。十三時四〇分、フェルガナーからサマルカンドまで五〇〇 Km走破である。バスは西に向かつて走っている右側は畑で左側は砂漠である。午後の陽射しは強く、クーラーのきかないバスは熱い。それでも天井の開け窓から少しは風が入ってくる。昔のシルクロードの旅のことを思えばこれでも極楽のようなものであるとのこと、それにしても熱い。バスの中が何度あるか分からないが窓は開けられない。この道を通っていたキャラバンのことを考えると、バスの旅はなんと贅沢なのだ

ろうかと考えさせられる。バスは、少し大きめの町に入ったらしい、涼しげな柳の並木道がある。コーカンドの町に着く、ここはまだフェルガナ盆地の中である、バスを降りてムハマド、サイドフダヤ汗宮殿の見学である。

この宮殿は、一八六三年から一〇年の歳月をかけて建設されたものである、今は博物館になっていて、この辺りの自然の動物の剥製や芸術品などが展示してある。中でも王の玉座接見の間にある王室の質の高い首かざり・衣類、控えの間には細かい細工の木彫の什器などが飾られていて、近世の中央アジアの王国の繁栄した歴史を垣間見ることができ感動する。宮殿の外には戦前の日本のこの家にもあった、大八車・挽臼などがあり、日本との関係がなんとなく理解できた。ここでコーカンドの娘さんと写真を撮る。この辺りの人は良い人が多いようである。どうも日本人を見たことがないらしい。

十六時二〇分、バスはコーカンドを出発する。サマルカンドはまだ遠い。相変わらずバスの中は暑い。道の両側には桑の木が並木のように植えてある。新しいシルクロードといふべきか。

十七時二〇分 タジクスタンの国

境である。ここで軍人の検問である。一日の内にまたウズベキスタンへ入るのでビザ無しで通れるようだ。ついでこの間まで同じ国であったのにつの間にか国境ができたりこれがこの地域の宿命であろうか。中東では日本人には理解できないことが多い。国境といっても幅七、八四ぐらいの水路が道路に対して直角に流れているだけである。十九時チャイハナ休憩所に止まる。チャイは茶、ハナは家のこと。ここの奥にきれいな水の出る所があり見た目にはきれいな水なので飲もうとしたら団長に止められる。この水を飲んだら腹がい



コーカンドの娘さんたちと

れてしまうとのこと。頭に水をかけタオルで身体を拭く。今も昔も何ら変わらない砂漠のオアシスである。水は命の素だというのがありがたいものである。昔も今も人間の体質はかわらない。十九時三十分オアシスにきよならをして出発する。ここからまだ先は二七〇kmあるという道路に便乗をたのむ人々の姿が多くいる。まるで日本の終戦後の情景を思い起こす。ここからが正念場である。突然道路が狭くなり舗装もなくなり起伏もある道になる。そこかしこに便乗を願ってバスを待っている果たしてこの人達は希望どおり便乗できるであろうか、つまらない心配をする。二〇時、辺りが薄暗くなり女性の方のトイレ休憩は砂漠の中。バスは一路サマルカンドを目指して進んでいる。この辺りまで来ると何にも見えない夜の砂漠である。二十一時三〇分、サマルカンドのホテルに着いても食事は望めないのが運転手の馴染みのチャイハナに行くがここが閉めているのでトイレ休憩をする。真つ暗な外に出てみる、ウルムチの夜空の星も良かったがこの星も良い。空気が清澄なのである。

二十一時四〇分、別のチャイハナに着く。人数が多いので戸外に席をしつらえる。長くバスに乗っていた

ので腹が空いている。日本から持っていた、カップラーメンが美味しい、夜の砂漠のど真ん中で食べる味も良いものである。また、温かいビールも苦にならない、羊の肉の焼物など運転手のおごりである。中東では予定がずれた場合は、理由はどうであれ運転手の責任とのことであるらしい、この運転手にはこの後、サマルカンド・ブハラとお世話になる。

二十三時チャイハナ現地の人にさようならして、また、砂漠の中に出発して行く、バスは大型で一人で二席分使用しているが、暑さと悪路のため寝ることができない。

二時三〇分。ようやくサマルカンドのホテルに着く。長い長いバスの旅である。ロビーで暫くの間休憩をするがこのホテルも節電のため薄暗い。何はともあれ、フェルガナを出発して十三時間のバスの旅であった。この間に検問十六回あり、軍人・警察と交互の検問である。夜の行動を取り締まるのであろうか。一回の検問に幾ばくかの関銭がいるらしい、一回の検問は早くて二、三分、長いので十分ぐらい、時には軍人がバスの中まで入ってきて懐中電灯で人員を調べることがあった。このような場合の運転手の対応は敏速で素晴らしいものがあった。この運転手はア

ラブの血を引いている人のようである。通訳のオリガさんの対応も目を見張るものがあった。

移動中のバスは、前照灯のみで中は真っ暗である。バスの中を明るくすると厳しい取り調べを受けるとのこと。十三時間の移動中いかに仕事とはいえ、オリガさんの態度は実に立派なものであった。ホテルに着いた時、「皆様、お疲れになったでしょう」このオリガさんの一言でなぜか心が落ち着いたものである。

このホテルのロビーで一人の老人が私達の到着を待っていた、缶ビ―



チャイハナにて

通信記念日によせて

石井 六郎

次回は、『青の都サマルカンド』です。お楽しみに……

今回は、『青の都サマルカンド』です。お楽しみに……

七一号拝読致しました。この記事の中に気になる部分がありますので、一言申し上げたく存じます。

日本の郵便業務開始の正確な年月日について、同記事では次のように書いてあります。

「四月二十日と言えば通信記念日。

明治四年あの前島密により郵便業務が国営により開始された日である」

この文を読んだ人は、明治四年四月二十日と思うでしょう。しかしそれは、誤りです。

正しくは、旧暦（太陰暦）明治四年三月一日です。四月二十日という

のは、新暦（太陽暦）に換算した年月日なのです。

新暦の年月日で記念日を制定したのは、通信官僚です。昭和九年の通信記念日設定にあたり、開業の三月一日が新暦に換算すると四月二十日であるとして、その日を記念日にしました。最近の郵政省は、開業の日を『明治四年四月二十日（旧三月一日）』と表記しています。そのためか、郵便局員に聞くと四月二十日と答える人が多くなりました。

これを正しいとするなら、大政奉還や東京改名等々全部新暦にしなければなりません。

記念日を新暦で制定した理由は不明ですが、三月一日は年度末で予算獲得の最中であるので、新年度の四月にしたのではないかと考えています。

明治六年の太陽暦施行後は、新暦だ旧暦だと言いますが、明治四年当時の暦は一つ。三月一日は三月一日なので、後世これを自分の暦に換算して変更するのは、犯罪ですらあると思っています。せめて『明治四年三月一日（新暦四月二十日）』と書いてほしいと思います。

尚、現在発見されている日本最古の封筒は、明治四年三月三日です。四月二十三日を開業の日としたら、二

セモノになりそうです。福山の郷土史の先生方も新暦で書いていて、心配です。このままでは備陽史探訪の会までマチガイ促進に加担することになるので、一筆啓上します。



今号は、民俗を取り扱った原稿を中心に紙面を組みましたが、いかがだったでしょうか。寄せられた原稿のうち、載せることのできなかったものがあったことが残念ですが、執筆者の方々にはこの場をかりて、お礼を申し上げます。

次号は会報七三号、一〇月二〇日ごろ発行の予定です。つきましては、原稿を募集します。

特別、原稿の内容に限定はありませんので、小説なり随筆なりエッセイなり何なり、お気軽に寄稿をお願いいたします。

（編者）

事務局だより

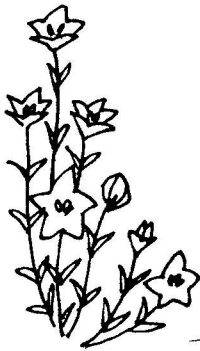
残暑お見舞い

申し上げます！

連日しのぎ難い暑さの残る今日このごろですが、会員の皆様にはいかががお過ごしでしょうか。

今年暑さに加えて、大腸菌O-157が猛威を奮っています。何が感染源なのかわからない今、注意のしようがない部分もあります。油断は禁物です。皆様特になまものにはくれぐれもお気をつけて、つつがなく夏を乗りきることが出来ますよう、お祈り申し上げます。

役員一同



新入会員紹介

備陽史探訪の会へようこそ！

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

山城志第十三集発行

事務局日誌

堂々一〇四ページの大作ができあがりました。発刊こそ予定より随分遅れましたが、内容はかなり充実したものに仕上がったのではないのでしょうか。

「数多く出版されている歴史愛好サークル会誌の水準を押し上げるものになったと確信しております」と、編集者・磐座亭主人氏も自信たっぷりです。

会員の方のお手元にはすでに届いていることですが、非会員の方にも一冊一五〇〇円（送料二七〇円）にてお分けしております。事務局の方までお問い合わせ下さい。

* * *

同時に、山城志第十四集の原稿を募集します。原則として日本史、郷土史に取材した論文、随筆、紀行文、小説、短歌などを、四百字結め原稿用紙三〇枚の範囲内でお寄せ下さい。締切は九月末。原稿の集まりの悪い場合は、順次繰り下げます。

発刊が遅れないためにも、多くの原稿が早く集まるようにご協力お願いします。

・六月八日（土）「古事記を読む」参加二三名。終了後、六月例会資料作成。

・六月九日（日）「六月例会」「浄土寺と因島史跡巡り」講師木下和司、日野雅友。参加五十名。
・六月十五日（土）「備後古城記を読む」参加十五名。

・六月二十二日（土）会報七一号発送作業参加六名。

・六月二十九日（土）「第六回郷土史講座」備後における福島正則の足跡」会場福山城月見櫓。講師杉原道彦。参加三五名。
・六月三十日（日）「掛迫古墳測量調査」参加六名。

・七月六日（土）「古墳講座」「備後の主要古墳」参加十五名。夜役員会。参加十名。

・七月十三日（土）「古事記を読む」参加二三名。終了後、山城志十三集発送作業。

・七月十四日（日）「七月例会」
「岡山の旧住宅を訪ねて」講師神谷和孝、平田恵彦。参加七三名。

「掛迫古墳測量調査」参加七名。当日を以て測量完了。会員の皆

様のご協力を感謝いたします。
 ・七月二〇日(土) 『備後古城記を
 読む』芦田郡の部を読む。参加
 十四名。

・七月二七日(土) 『第七回郷土史
 講座』「中世の寺院建築」講師
 木下和司。参加二〇名。

＊特に断りのない場合、講座等の会
 場は福山市中央公民館(花園町)

今後の行事予定

・九月七日(土) 『古墳講座』

会場取得の都合により、時間と
 場所が変わります。ご注意を!

〔会場〕市民会館二館会議室

〔時間〕午後七時から

〔会費〕資料代百円

・九月十四日(土) 『古事記を読む』

〔会場〕中央公民館

〔時間〕午後二時から

〔会費〕資料代百円

・九月二一日(土)

『備後古城記を読む』

〔会場〕中央公民館

〔時間〕午後七時から

〔会費〕資料代百円

『広島県郷土史研究協議会大会』

鞆公民館にて。

事務局までお申込み下さい。鞆
 の史跡巡りもします。

・九月二八日『第八回郷土史講座』
 「毛利の備作進出と秀吉」

〔会場〕中央公民館、午後二時より
 講師・出内博都。会費百円

九月例会

・井原、笠岡史跡探訪バスの旅

〔日時〕 九月八日(日)

〔集合〕 福山駅北口

日キャッスル前、八時

〔見学地〕笠岡、井原方面

〔講師〕 後藤匡史・七森義人

〔定員〕 七十二人

〔会費〕 会員三一〇〇円

非会員三三〇〇円

〔その他〕雨天決行、お弁当持参

九月例会のご案内です。今回は笠

岡市の主要な古墳の一つ、長福寺裏
 山古墳を中心にまわります。

バス例会とはいっても歩くことが
 多いので、履きなれた歩きやすい靴

と、まだ暑い時期なので汗を拭くタ
 オルなども持参してください。

まだ募集中です。お早めに事務局
 の方までお申込みください。

山口・防府一泊旅行

・元就の足跡を訪ねて

〔日時〕 一〇月一九・二〇日

〔集合〕 福山駅北口

日キャッスル前

七時四五分

〔会費〕 会員二八〇〇円

非会員三〇〇〇円

＊振込用紙を送りますので、一万円

（前金）を振り込んで下さい。キャ
 ンセルの場合、一週間前迄は会費を

全額返却します。それ以降はキャン
 セル料をいただきます。

〔その他〕雨天決行、お弁当不要

一年でもっとも過ごしやすい季節、
 秋。一泊旅行に出かけませんか？

今回の旅行では、来年一月からN
 HKで放映予定の『毛利元就』ゆか

りの寺院などを中心にまわります。
 時代劇を楽しむには、背景を知るの

が一番。元就についてよくご存知の
 方々も同行されますので、予習がで

きる絶好のチャンスです！
 なるべく早めに事務局の方までお

申込みください。振込用紙と旅行の
 詳細をお送りします。

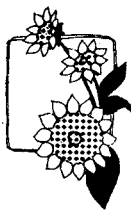
編集後記

遊びをせんとや生まれけむ、
 戯れせんと生まれけん、
 遊ぶ子供の前聞けば、
 我が身さへこそゆるがるれ

子供たちの声ひびく夏休みも、
 終わりに近づいています。中世の
 今様が歌ったように、子供たちが
 ら元氣をもらって、きたるべき残
 暑にそなえたいものです。

暑い夏は暑いなりに過ごす知恵
 を、日本人は持っているはず。

どうでしたか、皆さん。今年の
 夏を楽しめましたか？冬の日さ
 ながらのクーラーづけの日々で、
 健康を害されなかったことを祈り
 つつ、会報七十二号をお届けします。
 (編者)



備陽史探訪の会事務局 ☎七二〇
 福山市多治米町五一一九一八
 ☎〇八四九(五三)六一五七